



若い父親への手紙

——スホムリンスキーの教育実践(7)——

「私たちは、子どもたちと一緒に労働しています。そして、恐らく、すべての教育はそのことにつきますでしょう。彼ら自身、労働するということによって教育されるのです。」——人間形成における労働の意味を問いかけた論文《若い父親への手紙》(下)

(前号に続く) ピョートル・グリゴリエヴィッチとアンナ・ペトロヴナの子どもたちは、菜園とぶどう園の切盛りをまかされています。わからないことがある時にだけ、両親は彼らを手伝ってやります。菜園には、子どもたちがぶどうの苗木を栽培している用地があり、その苗木を学校の友だちに分けてあげます。それで、その菜園は「みんなのための菜園」と呼ばれています。りんごやなしやぶどうの収穫はすべて、友だちや同級生など、二十人の小さな子どもたちのものです。何かの夕べや祭りの日には、ここで小さな子どもたちは読書をしたり、芝居ごっ

こをしたり、果物を喜んで食べたりしています。

夏の教週間、ピョートル・グリゴリエヴィッチとアンナ・ペトロヴナの子どもたちは蚕を育てます。こうして子どもたちは服や靴、教科書や参考書を買うためのなにかのお金をかせいでいるのです。彼らが少し大きくなった今では、彼らがかせぐお金は、大都市への見学旅行ができるほどです。

ピョートル・グリゴリエヴィッチの子どもたちは、モスクワへも、レニングラードへも、キエフへも行ったことがあります。でも、長く愉快な旅行も、彼らの畑での労働の楽しい日々が呼び起こしたような大きな喜びややる気の色あせたものにすることはありませんでした。親愛なる親、教師の皆さん。子どもが初めて野原を見、初めて朝やけを見、初めて響きわたるひばり

のさえずりに耳をそばだてるような、そんな幸福な年頃に、労働の世界での子どもの精神生活を始めるようにしてやって下さい。

私が親たちから受けとる多くの手紙には、「どうして子どもは私を尊敬してくれないのでしょうか」という不安が綴られています。

尊敬は、父・母と子どもたちの精神生活が共通のものであるというところから生まれてきます。尊敬とは、親の仕事や単に知ってあげればよい、親のものではないのです。母親が自分のためにどれほどの健康とエネルギーを注いでくれているかを、息子が十分によく頭でわきまえていても、母親に対して無情な、冷淡な態度をとることもまだではありません。両親を尊敬すること、それはつまり、何かの中に自分自身を表現することであり、自分自身の手でつくった何か、人々のために、人々の幸福のためにつくった何かの中に

自分自身を見ることに他なりません。母親や父親に対する子どもへの愛は、愛する人に幸福をもたらすために心をくだくこと喜びとしてあらわれます。

次のような内容の手紙が何通も私のもとに寄せられました。「私は大都市に住んでいて、研究所(あるいは設計事務所)に勤めています。本場の教育のためには、自分の子どもを職場へ連れていかなければならないのでしょうか。私と一緒に働かせなさい、ということなのでしょいか?」と。もちろん、そうではありません。必ずこうしなければならぬという訳ではないのです。しかし、あなたの子どもが人々の心で見、感じ、人々に自らの心を傾けるようにしなければなりません。

労働のためには、必ずしも畑や牧場が必要ではありません。最近のことで、州の都市で私は次のようなケースに出くわしました。六年生のアリョーシャの母親は、息子にどんな仕事を

させればよいか、さっぱり思いつくことができませんでした。他にも退屈病で苦しんでいる子が何人かいました。ところがまさにそこに、その建物の中に、彼らの目の前に、誰もその人にとっての、目の不自由な障害者が住んでいたのです。自分の隣に、人の助けを必要としている人がいることを子どもが心で感じとることができないでいるというのに、どうして父母への尊敬についての議論の余地がありませんか。

労働は、労働が人間に対する態度である場合にのみ、幸福の注意深い守り手となり、活力を与えてくれる源泉となります。子ども時代の労働を通してあらわされる人間に対する態度は、成長してからの市民的義務の基礎となるのです。子ども時代の労働によってのみ、非常に重要な人生の真実が認識されます。労働とは困難なものであつ

て、どんな状況にあってもそれは、安易な気晴らしではありえない、という真実です。学校においても、家庭においても、社会においても、私たちの最も重要な課題は、子どもたちがしっかりとした共産主義的信念をもつ人間として、立派な市民生活を送ることができような、高い理想と燃えるような心と、明晰な頭脳をもつ人間として、実生活に入るようにすることにあります。

さあ、これで話を終えることにしましょう。問題は、幸福についてですが、話の方は本質的に労働のことに結びついてきたのです。教育の論理・世代継承の論理を示すためには、このようにする以外に方法はないのです。もしあなた方も、自分の子どもたちへの幸福を与えることができるなら、その子どもたちは真の人間になることでしょう。

《訳者の解説》

以上、三回に分けて、《若い父親への手紙》を連載してきました。

子どもたちを幸福にするためには、彼らに「人間的な要求を育てること」が重要であり（それが「学校教育や家庭教育の本筋である」と述べていました）、その点で「強力な教育力をもっている」のが「子ども時代からの労働」であるというのが、スホムリンスキーの主張の中心点です。さらにつけ加えるなら、この労働は、周囲の世界とともに自分自身を写し出す鏡であり、子どもたちをして、「人々の心で見、感じ、人々に自らの心を傾けるように」させるのであり、さらに「非常に重要な人生の真実」を認識させるものであると述べられています。ここでいう「人生の真実」とは、「労働とは困難なものであって、どんな状況にあってもそれは、安易な気晴らしではありえない」ということでした。ここには、労働と遊びとが区別された労働観を、子ども時代から育てることがきわ

めて重要であることが、主張されていると考えられます。私たちの日本においても、この問題は非常に重要です。このことは、最も典型的には、いわゆる非行少年たちの労働観にあらわれているように思います。彼らの労働観が、「働くことそのものに対する呪咀^そ」「労働に対する呪咀^そ」であり、労働と遊びとの区別がない労働観であり、そういう労働観のいきつくところが非行であるといわれていること（例えば、山口幸男『現代の非行問題』民衆社一九七八年参照）を考えると、スホムリンスキーの主張は、きわめて普遍的な妥当性をもつものであると言えるように思われます。

今日の日本の教育現実を考えると、き、「労働が人間そのものをつくりだした」（エンゲルス）ということの意味を、日本の現実に即して、さらに具体的に深めることが求められているように思われます。

（横山悦生・京都大学教育学部大学院生

杉山明男ゼミナール）